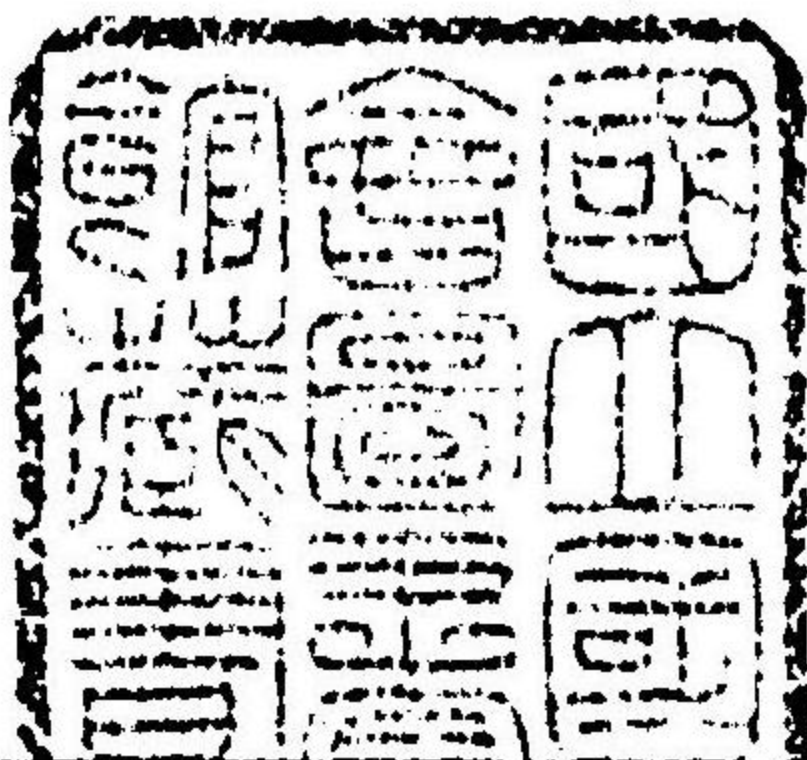


漢書

2



現今支那事情卷之下

近來擾亂

支那近來に至り數々外國と戦争し毎不敗績し
て國威を滅ぶるの権輿と乾隆帝の時代不
抑も乾隆帝と明君よて世上頗る阿片煙流行を
を患ひ其害を作まことを知し嚴令を下し渡
未だも阿片を需ぐ事を禁し且つ其所有の
阿片を盡く焼しむ然もども英人等密に不交易

横濱 神奈垣魯文鈔輯

80529

する事猶止まず其後嘉慶帝の世不至り益盛し
 して下民の嗜む事甚ざりと雖も敢て禁ずる事
 能はず蓋し當時を文學不耽り武備を講ずる事
 を忘る泰平を娛む國勢暗不衰ふ其子道光帝の
 初よりより懦弱の佞臣皆英伊里布の徒宗室の大
 家なるを以て相國の位不居り權柄を弄するを
 榮し其人を選舉するも唯柔順する者を用ひ
 て大官不任し專ら要路不當てしめけるが故
 不賄賂公行し政事不正經ある事なく遂に外國
 の侮りを受るに至る時不英人等清國の紀律頗

る錠のたるを窺ひ又阿片を持來り交易する事
 次第不多し抑も阿片の物たるや麻毒甚ぞ強く
 五分以上を服するときは或も麻死救ふるも
 比然ども烟草少しく和し煉吸するときは諸病
 痛楚を除き哮喘を止め一旦精神を愉快する事
 美酒不酔ふが如し故不貪苦慎懐の人と雖も此
 を用上色を心氣寛懷安眠の樂を得る事あり
 故不一度吸ひたる者も口を離れんと能はざる
 不至る故不英人等交易第一の物とし屬國印度
 不數多の罌粟を作らしめ獲し阿片を齎らし

來事二万七千兩百六十兩價金三其翌年又載七
來事二万四千餘兩然也支那の官吏等皆
賄賂を貪り縱りて問ふ故に兩國の商民も公
然として交易し忌憚る者少し事ふし時山東
の文官黃爵之ある者上書して阿片烟を禁せん
ことを請ふ其言甚よ剴切なり朝議此を是とし
新令を下し嚴に阿片を吸ふことを禁じ下民千
人を一保とし一人禁を犯せば十人皆罪不行ふ
且阿片を隠し置き或ハ烟管を貯ふ者も死罪に
處し官吏法を蹤ふ者ハ官職を奪ふ又英國

の船官等も論し嚴しく令を傳へ再び渡來する
事を制禁せ然とも密に賣買する者多し且支
那商民の陰に畜ふ事猶多し道光十九年
我天保道光帝阿片の制禁尚行届らざるを憤り
林則徐を以て廣東の總督に命じ嚴しく阿片禁
制の事を糾さしむ林則徐廣東に至る不及んで
英船二十二艘中畜ふ所の阿片を悉く徹捕し
と欲し船官等を責て其商館を圍み食道を断ち
以て英人を困苦せしめ終に船中不有する虞の
阿片二万二千八十二兩を取り盡く之を焼捨

とり英人快々として亞媽港へ去る林則徐も尚
進んで亞媽港へ至り阿片の禁を立する事廣凍も同
し且此地の密に賣買する商人數十人を捕
へて死刑に處し又英の甲比丹を責め密賣した
る英人を出さしめんとす船官等種々他言すと
雖も更不聽入る即ち軍卒を命し商館を圍
て食道を断つ英人等困む事甚どしく遂に密
ろふ香港へ遁る林則徐又江海の郡邑を令し英
人の上陸を防がしむ英人等大に怒り道光廿
年十一月の冬商船二艘を軍艦の如く不仕立大

砲を備へ廣凍を侵す林則徐も兼て待設けとる
所あり即ち十三艘の大船を出し許多の鉄砲
を備へて之を迎戦せしむと雖も皆未塵不打碎
り是大いに敗軍せり時不英人其牙痛不及び
る始末を飛脚船を以て印度と本國に注進せし
あふだいて印度へ居るスミットを大將として軍艦
數艘香港へ到着し英人の艦官を訪ひ乃ち進ん
で廣凍の入口に至る林則徐も六艘の軍艦も大
砲を備へ此を打撃せんとす然もども英船堅固
不して彈丸中ると雖ども打貫く事能はずスミ

支那書情

トモ猶も進んで刷しく打掛け悉く沈没せしむ
然きどもスミットモ亞船不就て和を乞ふと雖も
聽うず道光廿一年我天保英の軍艦國王の命を
受て亞媽不着船モ一手モ東印度勤番の提督ブ
レメルを大將と一騎兵歩兵都合一万六千を
引卒し又一手と本國の提督エルリットを大將
と一人敷と前不同し又翌日追々不到着し其他
ベンガラ國の土人種々の船不乗組て着船せり
此土人も極めて悪鈍不して淫欲甚と然ども
敵不向ふ時と矢玉雨霰の如くあるを恐るす少

しも死を願ミざる者あり故に英人此を養
戰場不用以敵地不上陸する時の先驅となすと
云ふ同年五月下旬英の軍艦亞媽を出帆し六月
七日隣欽海上不至り直ち舟山島を奪ひ之を
據れり蓋し此島を周圍二十五の海港有りて軍
艦の出入するに便利あり要津あり昔倭寇も先
取てしり四方を故に英人此島より四方小船を
出して侵掠を働くを以て乍浦より以南寧波鎮
海福州等の海濱の諸州悉く其難不罹りて萬民
寢食を安むる事能はば又北京不て舟山島の

五

守を失ふを聞て上下震驚を因て満清の大相國
伊里布欽差大將軍と為り海兵二万餘人を帥ひ
寧波に至り港口を封ト險隘を防守するの常度
を為る時不英國より一昨年林則徐が燒捨する
阿片烟の値銀二千一百万兩を速小受取べき旨
廣東の官吏不就て催促不及び官吏曰く禁制
の品物を齎來るときは此を燒捨ると國法よて
値銀を出すべきの理なきを指論すと雖も服せ
ず一國人民衣食の爲め不作りとる産物を悉く
取上げて其價を贖とざるの理あらんやと抗論

益々劇しく日々人を倍して督責一奈何ともす
ることふ一遂不廣東の官吏等憤り不堪の事
能も十乃ち軍卒不命一英人數百名を捕へて禁
獄に英人等大に怒り我國人民の産物を騙り
一値銀をも贖とせ却て我々使者を押監し討せ
んを何るべしと乃ち兵を出し廣東を侵伐
を清主之を聞て大に怒り皇姪奕山王を大將
と大臣數名並びに滿州の強兵五万を帥ひ廣
東不趣き英將エルリオットと戦ひ大に敗せ清
兵數千を損し又退きて廣東市街に戦つて敗ら

六

是清人兩度の大敗頗る畏怖るるの状を察し
 速々不値銀二千一百万兩を納て和睦せよと勸
 むと雖も聽かず同月英の本國より援兵數千軍
 艦えて到着す英兵其勢ひ愈々強大不して進て
 厦門を攻めて之を取り鎮海を奪ひ其勢破竹の
 如く寧波府の總督及び將軍等皆恐怖して我先
 不と逃去しうば英人戦たてして寧波を取り總
 て府城を取る毎小倉廩を開ひて米穀錢貨を散
 して土人の貧窮を救ふを常とせ斯くて道光廿
 二年我天保十二年春英人舟山不ぬる者疫病不罹りて

死する者多く又廣凍に於て亞墨利加人と牙
 起り兵勢頗る衰ふと聞き清の諸將此間不亞
 と舟山との通路を断んとせ英將スミットを豫
 め之を知り軍艦を燒いて之を打破り英軍の勢
 ひ復振ふ同三月清の大軍舟山寧波鎮海の三鎮
 を伐つて皆敗北し大臣以下軍卒の死亡數万人
 又其敗兵を聚め慈谿縣に化しけるを又押寄せ
 大いに之を打破り次て清國第一の備場ヤン
 ハス不進軍此時清人晝夜中不悉く燒拂つて
 逃去れり同四月英人乍浦を攻下す初め滿兵能

く戦ひ英兵を中ふ國に微塵もせんとせり然る
不清兵の満兵を棄て援を乞ふ不因り満兵却て
大敗せり英兵は猶進んで吳淞に逼る此城を揚
子江の入口とて清國無雙の名將と呼ぶる陳
化成五州の兵數万を卒ひて之を守る陳化成の
英人不備しや上城を増築し事一百二十四丁
別ふ大砲を鑄造する事六十門其最大なる者重
八十斤其他武備嚴密あり英人陳化成が威名を
憚り敢て攻撃せぬ其軍艦吳淞近岸を進退往來
すること十五六日城兵固く守りて出戦の様子

更不取る事あり英將其畏る可きの伎倆なきを
探り直不攻撃する事恰も迅雷の如し陳化成は
技術を盡して防禦せし雖も終不城陥りて戦死
す北京に於ても吳淞に陥り陳化成戦死すと
聞て支那大臣等英人長江に入らん事を畏き數
万の人夫を起し數層不砦と砲臺を築けり英兵
等漸々之を打破り數層不於て大砲を奪ひ得る
事六百六十八門と云ふ又初ボツカテীগリ
ス城を攻落せしより屢々砦を打破つて此處ま
で大砲を奪ひし事凡そ三千餘不及べり且

支那軍情 卷之十

其中の大砲は黄銅を以て美觀に鑄造し征夷の
 銘のあるもの多し然きども皆英人の有となり已
 づ砲を以て已に撃つ事と為きり又揚子江蘇州
 浦より圖山關の間は水路四重の關鎖あり英人
 既ち第一第二の關鎖を打破りて第三關鎖外に
 石牌灣に至れり時清國執政者英伊里布等
 和睦を乞ふんが為ち英兵の擒十六人を歸せり
 然きども猶進んで圖山關を打破つて軍艦悉く
 長江に乘入りきと清國大臣等大に恐る傾り不
 和睦を請ふ英將等曰く清主自身に請ふべしと

以て聽を益々兵を遣んで長江西岸の陣營臺
 場數處を攻取り鎮江府を攻む當城は南京第一
 の輔翼なるを以て大臣及び將佐數多の滿兵七
 十餘と清兵數万にて固めたり英人此を攻撃す
 る事二日滿兵の戦死する者殆んど殲きて城遂
 ち陥る六月十八日英の軍艦鎮江を渡り燕子磯
 に至る南京を隔る事僅り三里あり清の相國
 者英伊里布等愈々恐る大臣數輩を使者として頻
 り和睦を請ふ英將等曰く實に和を欲せむ先
 我に阿片値銀を賤ひ且廣東福州厦門寧波上海

等の地を割て我英國の交易場と為し以後清英
 兩主官負も同等平礼を行ふべきを例と為し清
 主の實印を以て請ふべしと和睦せん使者歸
 りて其旨を告げ直ち北京に奏し清主も今も
 奈何としする事能く相國等々勧め不從ひ和
 睦を允し道光二十二年我天保七月廿四日清英
 兩國の大臣江卓府不會し和睦の議約を定む即
 ち四年前林則徐が燒捨たる阿片値銀二千一百
 万圓を三ヶ年不皆済すべし事其他兩國の官負
 應對の位階同等とるべき事且つ香港を割て永

英領地不歸し廣東福州厦門寧波等の五港を
 開きて交易場と為す
 斯くて道光二十五年我弘化阿片値銀皆済せし
 不因て英の軍艦上海舟山諸島不在陣者皆
 悉く引拂ひ去り廣東不滞留する者多し支那人
 ハ其始めより條約を慎守せしが次第に英人を
 悪むの氣增長し廣東市外近邊勝手不入込事
 を惡む日々不喧嘩口論殊小甚し遂に廣東を
 逐出し困苦せしむりて英國香港の奉行之を
 聞き大不憤り道光二十七年我弘化二月十七日

數艘の軍艦を密に廣東川不越うめボクカ
 ラギリス城を奪ひ翌日ワシントン港不在番の英
 兵と共に廣東小越き同處にて又此一ヶ處を奪
 掠し清國廣東奉行を聞き大に驚き自ら香港
 不行て英國奉行不面會一種々政事不行届不
 て下民等貴國人民不無禮を致したる過を謝
 ボツカラグリース城を歸さん事を乞ひ且七ヶ
 條の過書を出して城砦と交還せり斯くて道光
 二十八年我嘉永元年清英和親を結ぶと雖も舊怨未
 と解む殊に廣東人民を槩して英人を仇視し常

小黨を結んで英人を殺さん事を圖り因て英國
 商館の近村海岸の地は各軍艦數艘を備へて嚴
 重犯すべらざる事となり其後咸豐三年我
 永六廣東不於て支那雇奴の英船不在者を支
 那の官吏恣に捕獲せしより遂に兵端を開き支
 那人英の商館を焼く故に英の軍艦亦屢々の砲
 臺を毀ち廣東を焼拂ふに至る此は於て清國亦
 許多の償金を出し和を講せり同六年我安政支
 那人英商船アルロ一号を奪掠せり英國在留の
 公使其暴行を争論したる不支那官吏之を嘲

一 齒牙不懸る不足ざる事とせしを以て遂に
 兵端を開き比役や支那人の勇氣先年不數倍し
 且軍備あり小船隊を夥しく備へ英艦を攻撃せ
 一 盡く破壊せんと雖も尚降を請はず三年間
 能く英軍と相持たりしつて英政府治國の才
 名ありロルドエルジンを欽差大臣として支那
 不送れり且支那の事件ハ歐洲各國同狀の利害
 ありを以て佛國も欽差全權大使と共に一艦隊
 を送り英國を助けたり是を以て同盟軍大不張
 り英大使ロルドエルジン其主務を果さんとす

條書を以て送りし不確答あきを以て咸豐七
 年我英政の歳末に及んで海陸進んで廣東を陷
 れ水軍も北京を通ずる北河の砲臺を抜き益河
 流を溯り天津に至り一屢に支那帝同盟軍の北
 京に侵入せん事を懼き異議なく條約を書記し
 一 此盟約の大目ハ第一諸港を開きて通商す
 る事第二西教を弘むる事第三西教を奉ずる者
 を保護する事第四北京各國公使を在留せし
 むる事等なり此度の條約ハ支那帝必だ固守す
 る所ならんと思ひし水師提督本國に帰るハ

其職小代り咸豊九年我安政更不改正
る條約を重修の爲め英の使節ホーグ天津に
赴く途北河に到りし大に兩岸の砲臺を修繕
し不意に襲撃せしり英人死する者多く使節
も燒けし身を以て急ぎを脱きたり此時佛國の
使節も亦共此難を罹り
天津の條約北河を開き英軍艦の出入自由を
議定したる不盟約に背き是の如き暴舉ありし
を救すべしとざるの奸謀かりし是を嚴罰して後
を懲さんと翌咸豊十年我萬延の春英佛同盟軍

の軍艦數艘二万の兵士を率て海軍に北河の北
なるペタン河に駛入し水夫を上陸せしめ諸砲
臺の後面より攻め掛り此砲臺ハ港の方小當
り三里許の所不在り其他臺ハ韃靼の旗一條を
樹るの外寂々として軍氣の實を見る悉く砲
眼を鎖し全一兵何れもなし而して此路上泥濘
ふして大小兵士困難すと雖一彈丸を費さずし
てペタン迄進軍せり而して英將ホーランド
地理探索すべき爲め兵士一千を率ひ佛將も又
一千の兵士を率ひ相續て三里許進みし處に初

めて敵の哨營あり、難人其中居り、半里餘後の
 本隊を合し、三百人許隊を結んで來り、佛人の橋
 を越ると等しく砲發し、及べり、佛將令を下し、隊
 を兩岸に立てし、敵の騎兵二千許、左右に分ち
 英の縦隊の側面を攻撃せし、小より佛將と敵を
 して再び身を避くる地あり、よりめん、欲し大
 砲を令し、直ち哨營を撃破せし、め且佛軍隊を
 左に立て、英軍は右に立て、又先難兵を襲ひ、さ
 ちる英兵は其面を左に變じ、且急散兵を令し、
 砲發せし、其距離遠く、敵は敢て英軍に連せむ

又ブリガード隊と此時一千二百歩許前を進み
 て止り、第一レナメント隊と更散兵を出して
 相拒むと、敵の砲丸劇し、故に直ち其兵を
 收め、此に於て兩國の將官令を下し、戦を止め、使
 をペタンに馳て、兵の進退を問ふ、因てポーフラ
 ンド及びビモンハタン自ら來りて、其光景を考察
 せし、騎兵を用ふるに非ざるを其戦ひ難きを
 思ひ、遂に退軍し、決し其兵を引拂ふんとす、際
 背後の高處より敵の砲發せし、小より英軍に傷
 者三人、佛軍に六人、又此際難人と敢て尾撃

之を直ち其兵を歛め且此戦も特小勝利を得
 うるを喜び之を北京に報知せしと云ふ爾後
 人ハ其勇氣を増し或ハ陣前數百歩の地を
 劍を舞し嬉戯を為し以て同盟兵を慢侮せしと
 云ふ又ペタン小於てハ英軍水不足き小苦し
 舟を以て清水を運輸せしむる小其舟難人の為
 小妨害を被むる寡く因て海軍將帥の為
 通辨官モロレーを難陣に遣り難兵若し我兵小
 砲發せざきハ我兵も又敢て砲發せざると遂に
 談判を遂げ兼て支那字を用ひ書記せし休戦旗

を難人小贈り且告て曰く歐洲に於てハ特小此
 旗を尊び此旗を持する者ハ敢て害を加ふる事
 不し貴國も又然るを欲せしと此に於て難人等も
 亦其好意を謝せりと云ふ八月十二日同盟軍ハ
 ペタンを發し兵を二道に分ち一手ハ天津の歸
 路を斷ち以て難人の逃路を塞ぎ之をして太沽
 城に遁らしの外他ハ活路を求むるの地ありし
 一めんを計り既にして進軍兵隊ハ路上泥沼小
 困し之漸く少許進し一時較々堅土の地ニ到り
 衆軍少しく其脚を息せし不此際忽然難の騎兵

前小現き長く一行小整別一英兵の進軍を妨ぐ
 と雖敢て屈するの意なく忽ち之を追拂ひ已ふ
 一々鞭の騎兵頗る大軍小て陸續縦隊をふし凡
 二千ヤルドの距離小陣を布く時小同盟軍ハ前
 面カアルムストロン砲隊小令して進行せし
 め凡千五百ヤルドの距離小至り直ち小破烈の
 彈丸續々敵の頭上小散亂を其猛烈なる巨雷の
 空小轟く如く鞭の縦隊も喫驚の際一時皆散
 亂せしが須臾小して又集り列を整へ暫く拒戦
 せと雖猶敗走せず此際鞭の用ゆる大砲ハ無用

のレンガル砲みして毫も功驗なしと雖猶支柱
 して拒戦し既にして総軍疾轉移動して同盟軍
 を困せんを此に於て同盟軍の右翼に在る騎
 兵も未だ鞭兵の近寄ざる際部下の砲隊より劇
 しく射撃せしより終に隊伍を亂し敗北を又
 右翼に回りし鞭兵ハミルワルド部下の砲二發
 と前後の施條砲及びロツトン部下の回轉砲の
 射撃とを冒し四百五十ヤルドの距離に進み此
 世界中敢て知らざる者なき猛烈の砲火小對し
 支柱なる事良久し頓て彼の一部の騎兵横し同

盟軍横隊の前面を疾驅し急ぎ第四ブリガ
 隊の前面に射撃しつゝと雖終り敗れて逃去り
 たり此際健兵の射丸は多く地上に埋ま或は頭
 上を飛び過ぎ一も敵兵の傷害を為さばれ共同
 盟軍の彈丸は射つて敵兵を壓撃し暫時の交戦
 に健兵大に敗走せり又一手に敵の本營より約
 ね九百ヤルドの地は在る第二哨營に到り此處
 まで兵を左右に分け八百ヤルドの距離に於て
 射撃し又敵の騎兵左方に動くを見直ちに進ん
 で敵の本營及び左方へ動く騎兵を射撃し

ルハストロン砲二門火力劇しく終り敵兵其陣
 營を捨らんとせしむ同盟の後軍躊躇する小隊
 一連兵一百人餘不意に之を砲撃し其勢は神速
 なればバリニデナント此敵は應戦の備あらず
 あり適々シリクス兵の奮戦せしむり敵兵遂
 に襲撃する事能はず皆散乱して退きしと雖り
 子テナントハ重傷を負ひしと云ふ其他各處小
 小戦ありし健兵皆大敗して太活城の方へ却
 きしと蓋し此戦間同盟軍の死者二名傷者三
 十人餘ありしが健兵の死傷最も多く凡そ五六

百人ありて是より進んでタンク一の堡砦を
 攻む此堡砦を英佛製の大砲四十二門を備へ
 嚴しく拒戦すと雖遂に其防々可うらざるを察
 して驚擾して急ふ郊外に出皆前村を望み遁走せ
 しか同盟兵の尾撃するに繼兵の斃る者恰も
 球を轉せり如く加ふるに繼兵を其火箭の頭
 上より飛鳴散亂せり不驚き以皆大道を傍ひ疾走
 して河畔の一村落に逃匿し漸くタンク一
 村に入ることを得し此堡砦と村落との間ハ
 ベータン不等しく泥沼を浴ふる一帶の郭を

繞り郭内の地甚と廣く且泥土を以て造り
 房舎郭下を連り此に備へ大砲の周圍ハ繼
 人の屍體累々として山の如く亦此郭の如きハ
 敢て繼の砲兵の守衛すべき者不非ざる共下ル
 ムストロン砲隊の刷しく砲撃せしとき其燃撃
 不堪へ能く之を守りしを實に怪むべし此廓ハ
 大砲四十五門を備へ繼兵三四十人ありしと
 而して此戦ハ同盟軍ハ傷者僅くハ英人三名佛
 人十餘名あれども繼兵の死傷頗る多くして其
 數確定し難しと云タンク一の東南凡そ六十ヤ

ルド小堡塔あり之より三里許の處小僧格林泌
の本營あり而して其塔小て數多の旗幟を翻へ
頻り小戦闘を挑むの状を形せしめしが同盟兵
も又管時機を伺ひ更小戦ふの意あり因て鞏兵
ハ此小塔を出てヌンクー村の角隅小在る堡塔
より時々大砲を無放せしめ同盟兵ハ毫も其
傷害を受る者少く而して鞏人の警時如此と
一と雖遂小自り之を止めしめし然る小支那政
府より文書數回贈ると雖英人更小之ハ應答を
為さず後三日支那營ふて休戦旗を樹て數通の

書翰を贈り且英人の捕獲せし者を送還せべき
旨を言送り直ち小英兵一名及ハワドラス
一名を送還しし然る小此二名ハ囚留中支那
人の之を遇する殘忍を極め患苦の甚としき
為起しし能く至り殊小其手腕と兩踝
の如きを嚴小縛せしめし繩下の肉破き且軍
曹も喪心人の如く暫時妄語を吐く小至れり次
の日休戦旗を樹てしが直隸の総督末り相與小
談論の後英人小告て曰く今和睦を講ずべき為
北京小於て委員を任し當時既小發途の中小在

支那の事情 十九

り願くも此輩來着し講和の議定に至る迄も互
 不交戦を止むるの約を結むんと頻り不之を懇
 祈し且其軍不擒獲せし者十三人を送還せり因
 て同盟軍より又土人を交還しより然まども
 八月十四日同盟軍とタンクラー城を攻略し兼て
 諸塔を侵襲する為めロペルト子ピール氏の分
 隊を此城内に居らしめ軍議一決し諸塔の攻撃
 既し始まり砲聲天空に響き山谷に振れて數里
 間の地を震動するが如く互に不劇しく攻戦せ
 し英兵河を越んとせざる不船艦近傍に非ざる

より他物を以て船に代へ前岸に達するを得と
 して茲に浮橋を作らんとせし不韃兵堡塔の
 中より之を望み頻りに砲護せしが英兵ハルリ
 部下のアルムストロン砲一對をタンクラーの
 一方より運輸し劇しく之を發射せしより敵
 兵遂に敗走す此前岸の礮樹園中の數軒の人家
 有りて又太古と天津間の水道不出る一路あり
 佛兵を進んで此路に入りしが韃兵等左右の菓
 樹園の内不潜伏し不意に銃射せしより暫時
 拒戦して直ちに其兵を追知し木を伐り路を開

支那事情 卷之十

進んで一堡築き近づき遙う小之を望めを
 兵二三百許堡内を守りしより佛兵を勇を鼓
 急小此堡障を砲撃せし何ぞ料らん敵の偽
 計不陥り韃の騎兵蟻集し八方より圍撃し佛兵
 を恰も蜂巢の中にお在るか如く此に於て急使
 を馳せゼ子ラールモンハタン氏に援兵を乞ふ
 不より直ち小數百の兵と數門の大砲を以て之
 を救えしむ佛兵の數凡そ一千四百の多きに至
 り大不力を得て敵の騎兵を撃退し終り此堡障
 を抜き南岸の地を得たり又英兵も北方の堡塔

不向つて進行し大約一千ヤルドを隔て其隊兵
 を止め休戦旗を持して胸壁に近づき告る不和
 約を講し盟を結ぶん事を以て是とすつて守將
 と覺しき滿人之を聞き頗小傲設の心を生し謂
 て曰く余敢て汝の言を聽む汝等若し此堡塔を
 要する心何ふを當り同盟の兵を併せ來て之を
 取べしと此應接の間小マジヨルグラハム氏と
 堡塔の堅否及び形状の如何を熟察せし使者
 の退ぐくや否や敵兵の北方の兩塔より砲撃す
 る事極めて急あり然き共預トめ敵の攻撃不備

ヘーミルワルト部下のアルムストロン砲兵數
門の大砲を連發し大約一時間相拒み戦へり此
時敵の砲丸殊小烈しと雖僅く小陣具二三を破
壞せしのみにして死傷一名もなりと云斯て北
一月同盟軍ハ敵砦を襲撃せんと欲し英兵ハタ
ンコー及びビノルスフォルド間の中央に在る泥地
の陣營を出發す其勢凡そ二千五百人佛兵ハ又
ダンコーより進發せしが此勢凡千人餘又敵兵
ハ東方の將小明さんとすも項同盟軍の進撃を
曉知し急小各處の堡砦より砲銃を射撃し既小

我小及びビーガ六時半後小至りアツベルノル
スフォルドの火藥庫破烈して其響恰も震雷の如
く周圍の地を動揺せり既ふして又三十分後小
ローエルノルスフォルドの火藥庫も亦破烈せし
タ是河口小備する英の砲兵の射撃せし破烈丸
の為す所ありと又諸堡砦の發射大抵終りし後
英兵の一部も堡砦の門側を破り小銃を發射す
る為小三十三ヤルボの處小進入せしが此時佛兵
ハ右小在て英の歩兵ハ左小あり既小敵砦小入
り故小敵兵ハ砦を出て小銃を以て劇しく發

英軍の進撃

射たり此時佛兵の河に傍ふ敵塔の凸角まで
 突進し最も勇威を顕し水沼を越へて敵塔外營
 の側ある狭き處に赴き更ふ此處より塔壁を攀
 ぢ其内へ侵入せんとせしが敵の劇しく拒戦せ
 たり遂に志を達せざる事能はず又坑兵等も扁
 艇橋を架せんと欲し頻りに奮勵せしと雖敵の
 銃九刺しき故に兵卒十四五人一時に撃殺せ
 らる扁艇橋も一箇を毀らせしり此時英將ナビ
 ル部下の兵士も令し勇威を振ひ路の狹隘な
 るを顧みず第一に突入り又此時チャブレイン

ハ六十七聯隊の助けを得て第一に突塔し各處
 の破口を聯隊旗を樹て以て塔内の高臺上へ又
 之を立て高臺先登の第一人となり又同時小
 佛兵入り來り敵の守兵を追却して銃窓より之を
 狙撃したり而して入塔後英兵も高臺より敵を
 狙撃する事最も劇し此中堅塞外の地は戦兵の
 死體及び傷者の多きに實に驚きたり此戦争終
 りて後暫らくありて敵の南堡塔の壁上へ白旗
 を樹て以て和睦を請ふんと欲するの意を示せ
 しかる同盟の將帥等敵の如何ある條約を結を

支那事情 卷之十 五

んと欲するや之を檢める為り各部下の士官を
遣りけるが僧格林沁部下の英國譯官書簡を出
し而して其旨趣へ同盟兵と既し一堡塔を據有
せし故に支那人の河口より水關を移し以て和
議をりず為し同盟兵は天津迄行くを得可き權
利を許す不在りと英國士官大に怒り其書を批
破し以て譯官の面上に投じ且之を脅嚇して曰
く獨り一箇の堡塔のみにて自餘の堡塔も亦
皆午後二字前小異論を持せず交付するに非ざ
る直ち小軍を進め更し他の堡塔を攻撃すべ

しと而して敵兵の據守するローエルノルス
ルドホも高臺ニケ屢ありてアツペルノルス
ルトよりハ許多の大砲を備へ又同盟兵ハ攻撃
の設備を為し既し進んで敵塔も逼り其勢ひ殊
に盛なりしが此際敵兵ハ彈丸一箇を發する小
及むず突然門を開き守兵二千餘人皆降参せり
此時又南の堡塔も白旗を樹し故にバルクス
隨從士官と共に河を渡り南方堡塔を交付する
處分を為し同盟兵三百人其堡塔を交收する為
河を渡り至りしよりペーボの兩岸より天津

小至る全地を異あく絞收せり此日戦争小英士
官二十二人重傷を負ひ其中死する者多く且兵
卒の即時小死せし者十七人傷を被者百六十一
人あり佛兵も又死傷を合算する小大凡百三十
人及び士官中も亦死小至りし者ありと云然
き共敵の死傷を算する小違あく當時堡塔内外
を見る小地として死體の横をざるをなく其死
傷を合算せれば凡そ二千人餘小下らずと云
太沽を略取するの後同盟兵の砲船を遣り河口
小進むの道を開く一め海軍總督小及びバーク

スの二名兵糧船コロマンテル號小駕して天津
小向ふ此時隨行の砲船五艘ありし小兩岸の人
民等軍艦の通過するを見て頗る驚愕の状あり
と雖敢て抗敵の色を形せず者なく却て皆力を
盡し進行を便せしめ既小して途上小ありし
ワシントン村の城砦下小至りし小砦中寂々
して人影を見ず而して天津を距る十里許の処
小碓泊し翌日此地を護し天津の河下小ありし
城砦小至り水夫を上陸せしめ天津の前小碓泊
す時小支那の委員兩名支那帝の命を受け此地

不來りハ口ルドエルヂンを北京に護送する者あり因て同盟軍營より左の文書を投ぜり其略す曰く天津ハ之を英佛の有る歸せしと看做べし然し其地方官ハ舊し依り其職を行ひ其人民を保護するを聽すと是より先一隊の水夫既命を受け城邑の東門に據居せしが是に至り其門上ハ英佛の旗章を懸つし圓頂の格廓ハ布告を出し此地の人民ハ其所屬の改まりしを知らしめたり斯くて騎兵隊ハ其翌日天津に到着し而して第三のリュツプス隊ハ滯留して太沽の

城塔を成らしめ總軍ハ天津の城下ハ屯集せし此際上海の諸城陥りし後又南京ハ一揆起り住民等騷然たり故之を鎮靜の爲四十聯隊ハ彼の地に出發せり既にして和議を講ずべきの布告あり又當時同盟軍より彼を談判せし所ハ其條約ハ記載せし所の外更ハ天津ハ外國貿易場を開き且此度の償金八百萬テールを償えしめ而して此金を償えざる間ハ太沽の諸堡を還さざる可き談判ハ及べり此布告ハ因り衆人皆軍事の終りを思ひし九月六日ハ至

り突然急報あり其概畧ハパークスとエド二氏
 の支那理事官ウェーリヤンハンフ二人不
 委任状を見んと望ミ一時此二人不和議を決す
 可き権なきを知り又支那理事官ハパークス
 一トの両氏深ク已グ權の有無を究問せしめ
 宅轉已の官職を信せしめ以てロルドエルダン
 氏天津に於て全く和議を決せしめ然る後護
 衛の兵を減して北京に赴きしめ支那帝の宮殿
 不於て盟を結せしめんと為し更不談判を施し
 ロルドエルダン氏を危ふせんと為し不阿り然

を共ハークスウェードの二氏ハ敵の奸謀を看破
 し又エルダン氏ハ之ガ為支那理事官不告る不
 其支那帝より受けし委任状有る不於てハ速
 不チヤリ不至り會議を可きを以てせり此不
 於てホークランド氏ハ直チ不左ンチーの道
 路不前衛の兵を護し後軍以て進行しホウセイ
 ウー不着しパークスウェードの二人數々親王等
 と談判に不及ふと雖一も確乎たる事なりよ
 てホウセイウー不レジタントを置き十七日
 此地を護しマトウ不赴きロルドエルダン氏ハ

此處に在留を決しパークスの數名と共に出立
 ンペン村の中央に三日前韃兵千人許屯集
 せしが既し退きしと聞同十九日マドウを發
 一凡そ四里許進行せしが此時韃の探偵兵英軍
 の近づくる從ひ徐く退き一里許先の營内
 入り騎士數人休戦旗を持し而して彼等ハ常
 如く支那の遁辭を辨じり又パークスの數輩を
 伴ひ此日タンシウを出發せしが途上於て韃
 兵の大軍に遇ひ敵ハ大砲を各處に配置し分
 令戦の用意を為し且韃人の其初め懇懇に應

接を為せし其語次自うら其意を察する不足
 までパークスハ韃兵士官の遁辭なるを知り支
 那委員ハ背約の罪を論辨せんと欲し一旦復々
 ンシウに飯れり又支那の使臣とソルホーブク
 ラントに對し現ハ屯集せし數百の韃兵に敢
 て他故ある不非む同盟兵ハ要用の供給を徵辨
 する為途上ニ在るを確的ニ應答せし後直り不
 歸去れり而してタンシウより同盟兵の来るを
 待ち樹蔭に憩ひし韃兵の屯集する營地より
 五百ヤルトの處に英軍の營外に浴び突然シ

ガル砲及び許多の雜砲一時不射放て一故其の
 騎兵大に驚き漸く不して血路を得たり此時韃
 兵八万餘の大軍不て嘗て韃韃將帥の意ハ同盟
 軍を欺き静不之を敵地不誑誘然る後突然攻
 撃するを謀りあり然れ共戦ハ早く始まり
 故不其策遂不成就せざりりと又此時パীগス
 及び隨行の者未ど歸營せざるよりソルポーブ
 グラントハ同盟兵を直ち不進發せしむ然る不
 敵兵と劇しく砲發し而して其據守する地ハ大
 道を横切り長き數里の營陣後不十六門の砲蓋

を設け以て同盟兵を防禦し且歩兵の進行を妨
 げ騎兵の為ニハ特不妨害を為しりと云斯く
 て互不不戦闘二字間劇しく戦ひしが韃兵遂不
 堪る能く不漸々不引退きしが英の騎兵を執ひ
 不乘し之を襲撃せしが故不敵兵も本陣ハ退く
 の暇なく遂不速隔の地不遁逃しと此他諸隊
 不戦争ありと雖韃兵悉く敗走せり且此戦争不
 韃兵の死體ハ之を數ふる不暇少らばと雖同盟
 軍ハ特不損傷少し而して大砲七十四門を奪
 掠せり此戦争中不バークス及び隨
 從の者捕獲せらるりと

シンハ此日ホウレウホ在テ逆ハ大砲の響を聞
 き大ハ怪一ミ居ヨリ一ハ夜半後ソルポーグ
 ラントトヨリの報を得テ大ハ驚キ翌朝チヤンチ
 ヤウシホ赴キ擒獲せられ一諸人を回解せ一む
 る評議一決一英の騎兵を急ホタンレウ迄進め
 以テ其地形を探偵せ一め次テウエードハ兵を率
 以テタンレウホ至リ同地の壁外ホ於テ支那使
 員ホ面一回解の事を談判せ一ホ其吏員の曰ク
 擒獲ハ餘名ハ十八日戦糸將ホ始まらんとする
 前皆此地を脱ズリと然キ共全ク當日北京ホ押

送レ一と云因テ同盟軍ハチヤンチヤウシを
 發一遙クホ敵兵の来るを望ミ既ホ砲門を開キ
 兩軍相接一漸ク二百ヤルドの距離ホ及ビ一際
 變人ト大叫一テ堤を越ヘ火銃を發スると齊
 一奮激一テ英兵を攻撃せ一ウハ同盟軍ハ急
 ホアルムストロン砲を發射一ウリ因テ鞑人ハ
 初メ英軍ホ不意を撃チ既ホ退去セ人ト為テ
 思ハ大ハ勢ハを得テ更ホ馬小鞭チ開敷ト共ホ
 進撃せ一ホ何ぞ圍らん英軍の劇一ク彈丸を連
 發一加ふるホ第二ク井ン隊の施條砲丸ハ宛

雨霞の飛とか如ごとくあれをと毬た兵へい等ら辟は易やし一いつ聯れん間かん小せう敷し
 百ひゃく歩ぽ退たいき一いつか英えい軍ぐん此こ機き小せう乘じやうト更さら小せう騎き兵へいを左ひだり小せう
 進しんめ又またドラクン隊たいハ直ちち小せう進しんん心こころ毬た兵へいを襲せう撃げき
 一いつ奮ふん撃げき突とつ戦せん五ごひ小せう死しかを場ば一いつ暫せん時じ交かう戦せん一いつ戦せん終しゆう
 小せう支しある敵てきも敗ばい北きたす此こ一いつ戦せん小せう英えい軍ぐんの兵へい卒そつ死し
 者しや一いつ名な士し官くわん一いつ名な重じゆう傷かうをを買かひひとり其他か死し傷かうな
 一いつ雄ゆう韃た兵へいの死し傷かう頗なる多おほく諸しよ處ち小せう散さん亂らんせりと其その
 他た右みぎ方かた小せう進しん撃げきせ一いつ同どう盟めい軍ぐんハ韃た兵へいの騎き兵へいを追お拂はひ
 一いつが敵てきの大だい軍ぐん雲うん霞げの如ごとく其その數かず實じつ小せう無な雁げんあり
 一いつ雄ゆうアルムストロン砲ぱうの為ため小せう皆みな辟は易やし一いつ右みぎ往かう左ひだり

往かう小せう道だう逃たいせり又また佛ぶつ軍ぐんハ敵てきと石いし橋はし小せう戦せんひ一いつか遂すい
 小せう敵てき兵へいを追お却かへりり此こ時とき滿まん將じやうバウハ重じゆう傷かうを被かり
 兵へい卒そつの死し傷かう五ご百ひゃく名な小せう下からむと其他か隣りん村むら小せう潛せん伏ふく
 の韃た兵へい同どう盟めい軍ぐんをを見みて窓まど間かん一いつ銃じゆう射しゃする者もの少すくあ
 り一いつ次じ小せう直ちち小せう令れいして其その家か窓まど小せう火ひを放はなと一いつむ
 因よて韃た兵へい恐おそ怖おそし火ひ烟えんを冒かぶして遁に逃たいせり而しかして
 此こ處ところと都と城じやうを距きよる大だい約やく八はち里り許もとなりと一いつ同どう仕し
 二に日にち同どう盟めい軍ぐんハ韃た兵へいの進しんと来きるをを見み一いつか既すで小
 て一いつ士し官くわん手て小せう休きゆう戦せん旗かたを持もち来きて支し那な帝ていの弟てい恭きやう
 親おや王わうのロルドエルジン氏し小せう贈くわんる書しよ翰わんを出だしと

其略曰くツァイ親王及び穆親王の行ふ處
 屢齟齬の事ありを以て皇帝令者余をして之
 代らしめ以て特命全權公使に任じ更し和議を
 講じしめんとも因て暫時休戦の約を結ばん事
 を欲すとロルドエルチン氏之に答て曰く余嘗
 てコンマンンドルインチーブの名を以てツァ
 ヤウの総官たる滿人ふ投付せし約書あり其中
 不苛も北京に囚留する英兵を送還するも非
 らハ敢て休戦の約を結ぶを聽さず親王宜しく
 其書を讀て事を所置すべしと然るも今復恭親

王より書を贈りて曰く支那政府の實も英人數
 名を擒とせり然も其已も交兵の後も獲とるを
 以て正し會盟の事を諾し且兵を國外に退くも
 非ざれば以て其縛を釋き難しとエルジン氏答
 て曰く囚虜の宜しく釋て我も還すべし然らざ
 るも我軍直ちも進行せん而して其京師を陥せ
 其朝野を奪ふや否や不至りてハ吾能く知る處
 不非も貴國若し和議を要せば囚虜と盟約と常
 不同一時不為すべしと斯くて恭親王も之を議
 するも猶豫三日間を約す既もして期日幾んと

至る不未と應答あり故に英兵踊躍して交戦を
期せし佛兵未と未らむ又巨砲来らず因て援
兵巨砲の至る所を直ちに進撃せんと欲せ
し此間恭親王の數書を贈りて以て英軍の進
行を遅緩せんと請ふ其言茫然として更小信義
あり而して放擲の事を終論せざるなり廿九日
ハークス氏手り英漢両文の書を作り恭親王
の書と同封せざる者至る初め英兵の脅とせらる
りや後絶て其音信を得た故を以て英軍皆以為
らく必ず殘刑に遭ふとは是に於て始めて安否を

詳くふし士卒等大に歡喜せりと故にエルン
ハ前約を取り儘くふ一羣の銃兵を率ゐ進んで
一村落を取り以て之を據れり三日後軍運河を
濟りてチヤンチヤソン村に抵り以て仮に本營
とす既にして佛の援兵到着す都合其勢一万人
佛兵と左より英兵と右より全軍滿野瀟漢隊
伍齊整として往事四里許ふして帝國の京城を
見直ちに進んでタイレン門の大道に至りて軍
を駐む而して一手の佛軍已に圓明園に進入せ
りと聞き英軍又力を戮せ進むふ一名の敵兵を

見ず時ふ一の支那官人何りて其ふ所を聞くに十五日以前支那帝ハ後宮貴戚十三人を勢へ且數多の衛兵を將ゐて急ハ他方ハ出立たりと又佛兵ハ宮門を開き亂入せしを閣官等舉つて聖境ハ入るを拒し故ハ二人殺さ其餘ハ皆重傷を被むり抑此圓明園ハ雍正帝未ト皇子タル時賜園たり園名ハ康熙帝の宸翰ニして園の記ハ雍正帝躬ら筆を採り給ひ且乾隆帝圓明園の後記あり俱ハ石碑ハ勒ニ園中ハ十八門三開あり

殿宇堂室ハ稻麻の如く大宮門の前鞦韆道の東西皆湖水ハ是を前湖と稱ハ九園中ハ四十景ハ各御制の小序并詩ありと云ふ其勝景比類ハ金殿玉樓七珍を壯飾一實ハ無雙の名園あり一朝の兵燹ハ悉く烏有とありしこと最ト惜む可き極めふありや斯ハ名園既ハ同盟軍の手ハ入りしより兵卒等の分捕ト實ハ驚くハ絶たり十月八日支那政府ハパークス及ビローチニ其他佛兵ト十餘名放還せり同十二日支那人アンチン門を開ひて降

左方小と約二百ヤルドを距て別小圓壘あり
城廓と相對せ而して此壘内小砲臺を築き攻
城砲を備へ北京城廓を撃破する備へを為せり
漸く支那政府より擄とせし者を送還せし雖
其凶幽中の残酷實不忍びざる所あれば同盟軍
の怒氣猶消せん因てロルドエルゲン氏永く支
那人をして其罪を忘せざしめんか為帝の夏
宮を破壊し又圓明園を焼拂ふに至り然も共
死傷者の為支那政府と談判不及び償金を交
付せしむるの約と未決定せず故にロルドエル

ダントより恭親王小書を贈り先般談判不及び
償金高本月廿二日渡し同廿三日小盟約書小押
印し天津條約を取替す可き事を本月廿日の午
前十時迄返答せし時を再び我軍務をして北
京の帝居を取らしめん然も共英軍ハ毎小支
那人の食言せしを慮り北京襲撃の準備を為し
北京を焼拂ふ可き為大砲をチレン門小排列し
其動靜を伺ひ返答の如何を待し支那政府ハ
二十日の午前七時恭親王より英軍の談判せ
し諸件を総て承諾したる答書を送り來れり如

此支那にて談判不及びたる諸件を異儀なく許せしハ當時支那不在留する魯國特命全權大使の説諭小由るとの説あり又此結局に至らざる前小一揆起りて當府を攻んとて百里以内小近づきたりと此一揆ハセンス人小て當時奪掠を行ふの好機會とるを思ひ因て一揆を起せしなり又支那人ハ此一揆の起り小より同盟國との和議を結びて而して此一揆を取鎮めるを切要ありと考慮せし故小此の如く速ら小同盟軍の談判小随ひしこと疑ひ小しと爾後和約全く

成りて支那政府より一千二百万弗の償金英佛兩國小出し前小開きたる五港の外更小牛莊登州台湾潮州瓊州九江漢口等の八港を開く小及びり然き共支那内國當時の形勢ハ諸般小盜賊蜂起し近來小平穩の年少小其最巨大ある者を長髮賊と稱し二十年前此時をより江南の地方煽動し其勢猖獗小して始め賊魁大頭羊大頭鯉魚等南方を攻掠すること日々甚としく通路為小阻塞するも官人敢て制すること能ひば是於て鄰民私小義保を立て警護せ然る小義保内

洪秀泉あり者あり少年より膽略ありと馮雲
山と云る者と共粗天主教不通漸々跋扈不
羈の勢ひをふる終に蜂起の色を顕せり官
兵先河之を劃せんとい此時洪馮の二賊等騎虎
難下の勢ひあて官兵を抗拒郷人を糾合一蓄
髮易服せしめ振あて各所の州縣を陥入と咸豐
四年洪黨船舶二千餘艘不取り乘り順流東下
て安徽葉湖の兵を破り官兵を殺し殆ど數百人
遂に同年三月南京城を陥りて洪秀泉明代の舊
官殿を修整し頭上小天冠を載き身小黃龍袍を

洪秀泉の事

穿らけり大平王と稱し此小都一近隣を奪掠し
其凶縱寧波上海の邊ふ及び十餘年を経く平定
する能はざりしが英米兩國の士官支那政府の
兵小力を戮せ終ふ之を鎮壓せざるに至れり然
る其後同治八年三月我明治仲夏の李天津の居民攘
夷論を主張する者ありて為小黨を結び該地在
留の佛蘭西人男女併して三十餘人を暴殺せり
此小於て佛國既小大舉して軍艦數艘又も支那
海濱小迫らんとする際彼の國普魯士と戦争利
ありて大敗せしり遷然國政變革し共和

洪秀泉の事

政体とありて紛紜其間を得ざりしを支那危
 急の難を適き彼の擾亂了りし後前非を謝し償
 金を出し佛國ふ和を乞へり依て無事を得るふ
 られり且我日本國其藩琉球の國民と内地の深
 民曩に台湾蕃族の為に彼の島岸に於て屠殺せ
 られしより政府彼の生蕃を懲罰せしめんとな
 七年西郷都督遣赤松海軍少將等命せられ討
 台の舉ありしを支那政府半途より之を拒
 一より既し日支の間隙あらんとせしを我全權
 大使柳原辨理大臣大久保の両公直に航海して

北京に入り總理衙門に進みて彼の諸大臣を説
 降ありしを和議調ひて台湾蕃地を解兵せしむ
 及び則ち支那政府より五十万錠の償金を得て
 歸朝あり故に兩國の紛紜全く親睦し歸せしむ
 到る抑支那の文物他邦に先達ち教化世界に前
 駐せし其開化半途に駐り自ら尊大潛上し
 て他を蔑視輕侮せしより盟約に背き校點を常
 とし唯我獨貴の氣象を墨守して却つて敷度
 廉耻を蒙り漸々國威を減するに嘆まると又
 餘りあり悲悼しかなげや

CL.
NO. 46928

支那事情 卷之十

附云今聞支那帝遽然殂落の報あり聞く帝容
歳天華の痘毒に觸れ數日間病床に臥せしが
百治醫功なく終焉國喪を告ぐるに到れり帝
諱ハ載淳時年廿一諸大臣議してトシ親王
の季子載灃を立て帝位を嗣あり同治の年號
を改め光緒と云ふ

支那事情卷之下了

大慈育徳院

河内屋喜兵衛

阿南屋

伊丹屋善兵衛

東京屋

山城屋佐兵衛

津屋

須原屋伊八

神楽町

梶屋喜兵衛

神楽町

和泉屋市兵衛

阿所

和泉屋吉兵衛

Handwritten marks and signatures at the bottom of the page.

